

養殖戦略を勝ち抜く新技術

「複合循環式陸上養殖」～高知大学内で始動

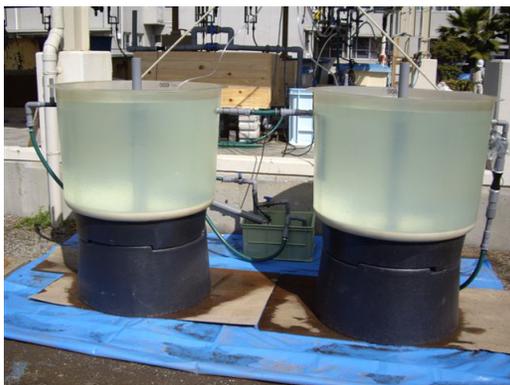
JIFASの創設(1994年)当時、それほど最近まで日本の多くの人々は、日本は栄光ある水産大国で、その技術も世界のトップレベルにあると認識していた。一般の漁業従事者はおろか、世界の事情に精通していなければならない行政官や水産の研究者さえ、その多くが水産の海外事情に疎く、すでに欧米先進国で、まるで夏の積乱雲のように、急速に膨れ上がる水産、なかんずく養殖技術の向上と養殖企業の発展に気づいていなかった。

むしろ当時の水産権威者には状況認識を求めて提言する本会の態度を忌避する風潮さえあった。斜陽産業ならいざ知らず、近年の水産物需要の長期的安定によって、むしろ市場は史上空前の水産物消費時代を迎えている。

早くから循環式陸上養殖の優秀性が叫ばれながら、その普及が遅れていることの最大の要素は、初期段階での設備投資が高価であるからです。その比率の35%は、魚介類排泄物による、アンモニア、亜硝酸、硝酸等の除去に要する機器類です。即ち脱窒に要する費用です。事業化した場合の損益分岐点が7～8年かかることは、致命的な欠陥でした。

この機に、「複合循環式陸上養殖システム」技術の実現は、実にタイムリーなことであり、世界の注目を集めている。

本システムは従来の単品養殖と異なり、2種類以上の魚介類を同時に生産するシステムです。それは、高知大学・平岡准教授発明の海洋深層水使用による「孢子及び発芽体の集会化による海藻養殖」の出現により、可能になったことです。この海藻養殖法と過去10年共同研究を継続してきた、アントニオモスケイラ氏指導による、オーストラリアのアワビ養殖法の複合技術が、本システムの基本となっている。



▲ システムの一部



▲ プロジェクトスタッフ